

中世大友府内町跡の高射砲台跡と大分市内の防空圏

木 崎 晴 崇

はじめに

昨年2020年は太平洋戦争が終戦し、75年の節目の年であった。コロナ禍の影響で、修学旅行にて県外移動ができぬ学校が、苦肉の策として打ち出したのが県内旅行である。その行く先として選ばれた地のなかに、佐伯と宇佐がある。長崎や広島から平和学習ができないため、県内の戦争遺跡を学ぶもので、地元にも戦争の歴史があったことを学んでいた。しかしこの平和学習の地には選ばれない市がある。それが大分市である。今では戦争の痕跡は、多くを見ることはできない。しかし大分市の発掘調査中に高射砲座と思われるものが数基発見されている。この砲座は高射砲とも機関砲ともいわれ実態が確定していない。本論では、高射砲の概説、高射砲陣地の発掘調査例を参考に、この貴重な発見例から、大分市の陣地の解明と防空圏について考察する。

1. 高射砲概要

本論にて取り扱う高射砲座を含む遺跡は「戦争遺跡」と呼ばれる。その定義は「戦争遺跡とは近代以降の日本の国内・対外（侵略）戦争とその遂行過程で形成された遺跡」とされる¹。次に高射砲とは、敵航空機を迎撃するための砲である。似た役割を担う兵器に高射機関砲、高射機関銃とある。高射砲、高射機関砲、高射機関銃の順に口径が小さくなる。それに応じて、最大射程、最大射高が小さくなり、威力も小さくなる。高射砲は高高度の敵機を迎撃するため大きな砲を運用し、高射機関砲と高射機関銃は低空を飛ぶ敵機に対して、小回りの利く兵装として運用された。

敵航空機は三元（高度、距離、方向）が常に変動するため、高射砲だけでは、命中させることは不可能である。高射砲が発射するまでには、①現在位置緒元の決定、②飛行状態の測定（飛行方向、速度）、③未来予想位置の判定が行われ、時限信管が設定され弾丸が発射される。

高射観測具は①から③までを行い未来位置の情報を高射照準具に自動的に伝達する。高射照準具では敵機を直接狙うとその敵機の未来位置に向けて弾丸が発射される。なお砲に直接取り付けられたものが高射照準具で砲と分離したものが高射算定具²という。観測機材のほかに索敵に用いる照空灯や聴音器、電波標定機の等も用いられた。

2. 高射砲陣地発掘調査事例

大分市の事例の前に、先行して行われた高射砲陣地の発掘調査事例を紹介する。名古屋市南区見晴町で見晴台遺跡³の発掘調査中に通信事務所跡、通信ケーブル溝、兵舎跡、風呂跡、廃棄土坑、高射砲陣地などが遺構として発見されている。この遺構群は名古屋港と、市街地に有数の軍需工場の防空のため、高射砲第124連隊第2大隊の、八八式七糎野戦高射砲⁴が6門を備えられた笠寺陣地である。

笠寺陣地の構成は、南側に扇状の半径45m半円形に、高射砲を6門据えた。各砲は約25m間隔があげられていた。その後列には第一、第二小隊長がおり、中央には3m測光器に兵4名、航速測定器に兵3名、班長以下8名が配置につく。観測班の後ろには、指揮小隊長がいて、中隊長に指示を受け、それを各小隊長、砲の順に指示が行き砲撃に至る。陣地と非戦闘空間とが分かれている⁵。

発掘された砲座はコンクリート製で、一辺約1.35~1.50mの八角形をなしており、断面形状は凸状である。中央凸状部は高さ20cm、直径約1.5mの円柱状である。凸上部上面には砲の架匡を固定する際の直径5.5cmの穴が12か所円状に並ぶ。(図1参照) 砲座付近は平坦で周囲には予備の弾薬をストックするコンクリート製の弾薬庫が3つある。砲台の出入り口はスロープである。

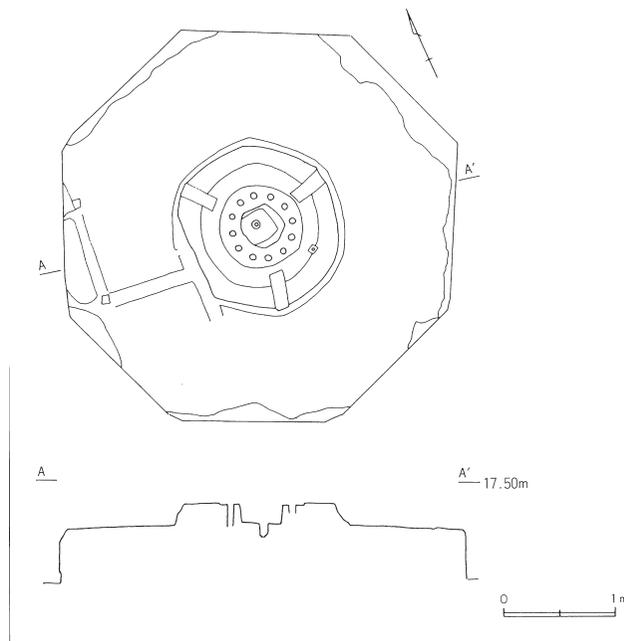


図1 笠寺陣地砲床 「高射砲陣地の構造 -名古屋防空隊を例に-」『三河考古』第5号より

同じく愛知県東海市名和町^{た さ や ま じ ん ち}太佐山陣地も調査がされている。(図2参照) 砲座は半地下式で掩体の高さを稼ぐためとされる。現存する掩体は高さ1.1~1.8mである。コンクリート製砲座は

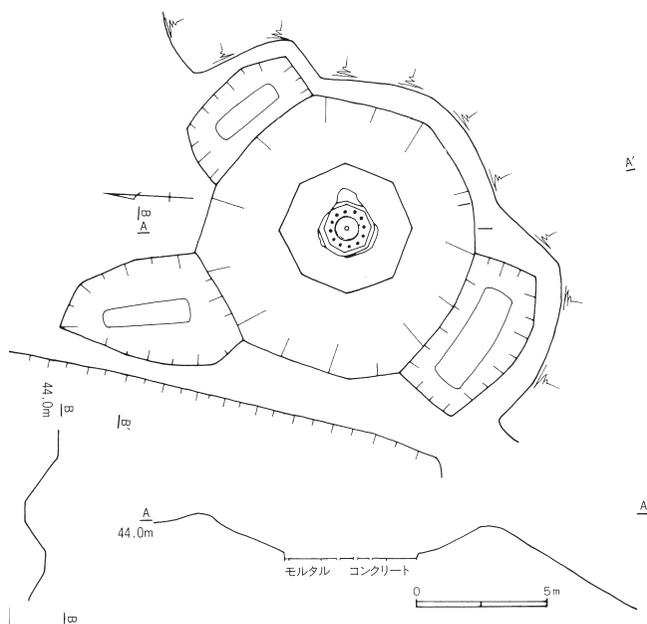


図2 太佐山陣地 砲台跡 図1と同様より

一辺約70cmの八角形である。断面形状はフラットである。これは備えられた砲が九九式八糎高射砲⁶であり、砲の種類に依存すると考えられている。中心部は直径90cmの円形で、直径9cmの穴が12個円状に並ぶ、中心には直径10cmの穴が開く。砲座の周囲はモルタルが八角形に塗られている。南側には、弾薬庫と思われる3.0×6.0mの方形の穴が空く。北側、北東側の穴は兵の待機所であると考えられている⁷。

その他調査事例も含め、高射砲陣地のコンクリート砲座は凸状とフラットのものがあるが、基本八角形である。中央には砲を固定するボルトの穴が円状に並ぶ。砲座の周囲には掩体があり、弾薬置き場や兵の待機所が近くに作られる。1の高射砲の概要でも挙げたように、高射砲を撃つためには算定具など、様々な観測機材や人員が必要であり、砲座の周囲にはそれら施設が付属すると考えられる。

3. 大分市の軍事施設と高射砲連隊

大分市と軍との関係の始まりは明治時代にさかのぼる。1890（明治23）年に大分連隊区ができ、1907（明治40）年には駄原に歩兵72連隊が来る⁸。その後大分航空隊が昭和13年12月15日に開隊する。戦争末期には秘匿飛行場が戸次や豊後大野にも作られた⁹。軍需工場も、昭和14年大分市今津留に呉の第11海軍航空廠（後の第12海軍航空廠¹⁰）に始まり、戦争末期には多くの民間の工場が軍の買収により軍需工場へと姿を変えた。（図3参照）昭和20年3月以降には空襲を避けるため、第12海軍航空廠の航空機組み立ては、中判田、滝尾に移動した。疎開先では横穴

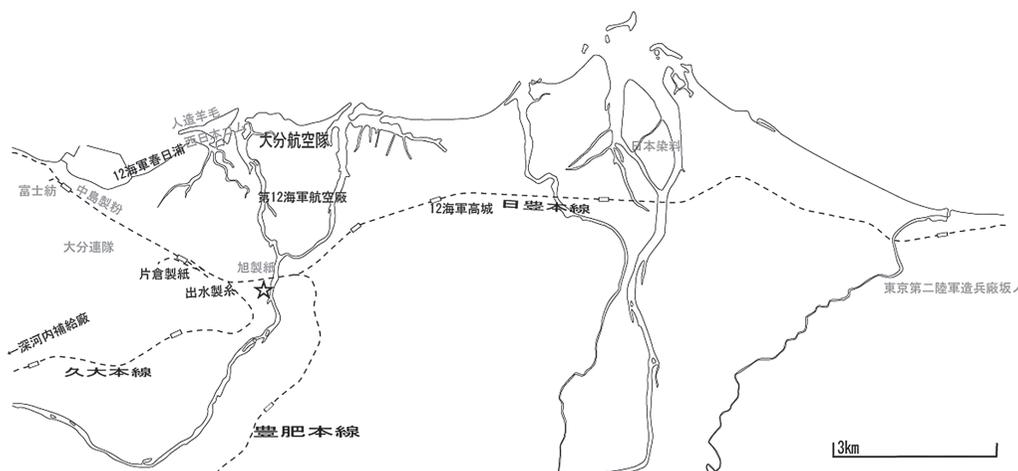


図3 大分市内軍事施設、軍需工場位置
☆は中世大友府内町跡第7次、第17次の砲座の位置である。

防空壕を掘り、田畑にて組み立てを行った。その他工場も各地へと疎開していった。

先述した通り大分には、第12海軍航空廠や陸軍小倉造兵廠¹¹といった重要な軍需工場が置かれた。大分は日豊本線、豊肥線、久大線がつながり、玖珠町には豊後森機関庫も持つ交通の要衝であった。アメリカ軍もこの点に注目し大分を攻撃目標の一つとして加えていたことが記録に残っている。

4. 中世大友府内町跡の高射砲陣地

中世大友府内町跡の発掘調査のうち、高射砲の砲座と思われる遺構が第7次調査、第17次調査にて発見された。(図4参照)所在地は大分市元町で、日豊本線の大分川を渡る鉄橋の手前である。日豊本線を挟んで向かいには大友氏館跡が位置している。

SX-344は第7次調査にて発見された。(図5参照) 一辺が4.4mのコンクリート製八角形の砲座で、断面はフラットである。中心は一辺が約72cmの八角形で、直径約8cmの穴が、12か所円形に並び、一か所にはボルト・ナットが残っていた。中心は、直径12cmの鉄パイプである。砲座側面一部には築設時のものと思われる木枠が残る。同じく側面一辺には直径12cmの鉄パイプが飛び出る。この砲座標高と同程度のレベルの塹壕がE地区南側断面に確認できる。戦後この砲座は人為的に埋め戻されている。この砲座に関しては高射砲ではなく高射機関砲であるとされている¹²。

第17次調査では砲座と思われる遺構は3基発見されている。SX115は半分が調査区外であり、判明しているのは半分ほどである。(図6参照) 一辺の長さは下記記SX001と同程度約1.9mの八角形であると推測される。断面はフラットとで、円状に並ぶ穴は12個と推測される。

SX-001は一辺1.9mのコンクリート製八角形の砲座である。(図7参照) 断面はフラットで、

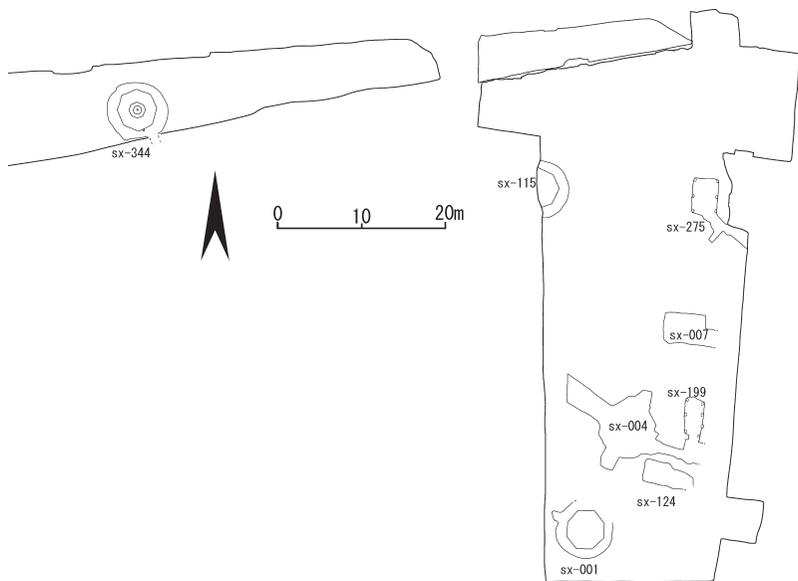


図4 中世大友府内町跡第7次、第17次調査区砲座位置

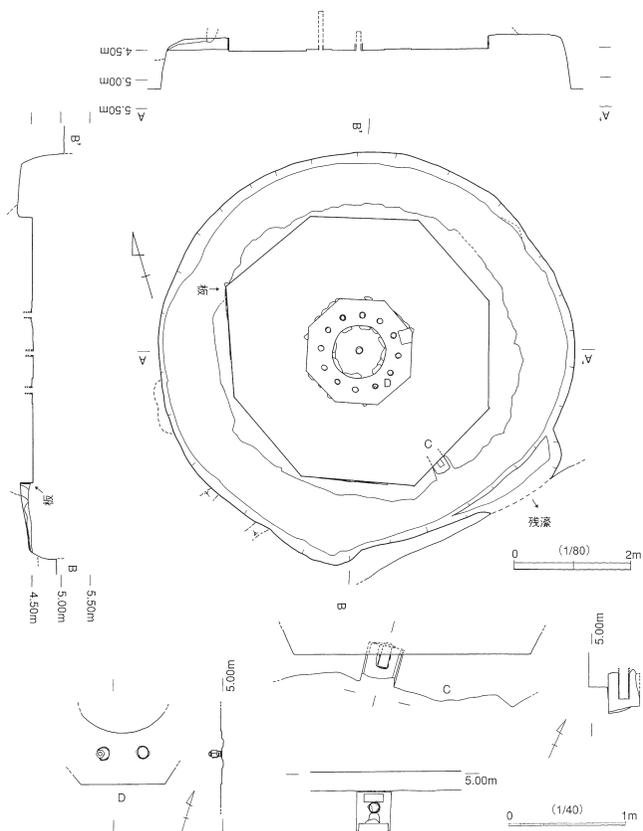


図5 SX-344実測図 『豊後府内3』より

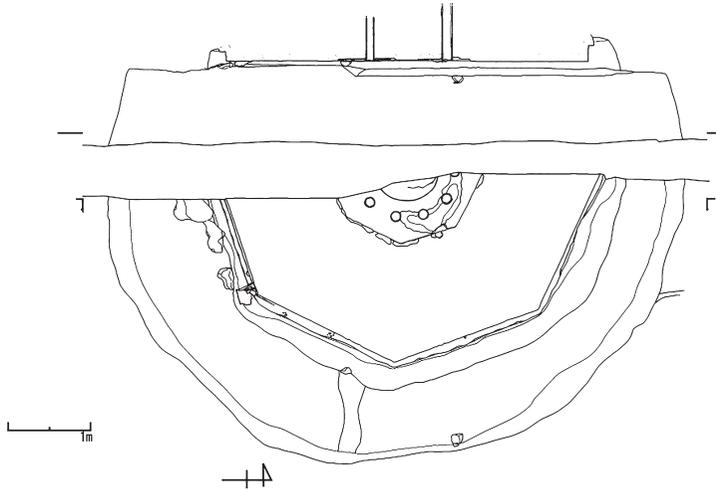


図6 SX-115実測図（大分歴史資料館蔵）のものをデジタルトレースしたもの

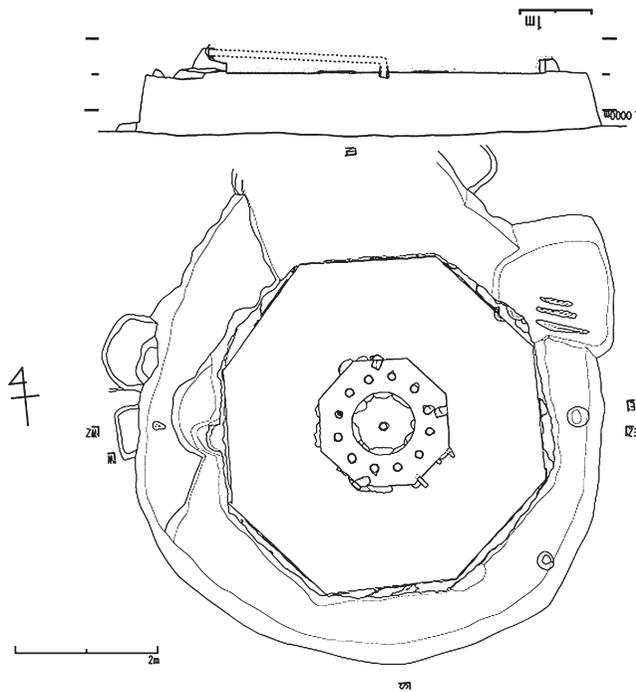


図7 SX-001実測図（大分歴史資料館蔵）をデジタルトレースしたもの

中心には一辺約0.7mの八角形で、12個のボルトを固定する穴が、円形に並び空く。内一か所にはボルトが残っている。中心には直径約10cmの穴が空き、これはSX-344同様に砲座基礎内部を貫通し、西側の側面から飛び出る。高射砲陣地築設要領の図と照らし合わせると、位置的にも電纜引込のための設備であると考えられる。この電纜とは電線、ケーブルと同義のようである。

この砲座は高射砲と考えられている¹³。

SX004は一辺の長さが3mの角材を六角形に組み、結合部をボルトで固定する。中心には木杭を、四角形に等間隔にて配置する¹⁴。砲床の西側には幅約2.6mの上りのスロープがある。北側に排水溝と思われる溝を持ち、これは有事の際砲を運ぶための物と考えられている。東側には幅約1m、深さ1mの床面の硬化した通路を持つ。この東通路はその先長さ約8m、幅約2m、深さ約1.4mの半地下式倉庫（SX199）へとつながる。SX199は柱穴を持ち、弾庫と考えられている。砲座南北に突出部を持つ。この砲座は高射機関砲と考えられている¹⁵。この遺構はコンクリート製砲座がおおよそ等間隔であるのに対し、イレギュラーな位置に存在している。

先述した愛知県の笠寺陣地、太佐山陣地、東京都調布の高射砲陣地¹⁶と府内町跡で発見された砲座を以下のように比較した。（表1参照）府内町のコンクリート製の砲座は規模や形状が太佐山陣地の数値に近似する。一方で笠寺陣地と調布の砲座は規模と形状が近似しており、いずれも装備していた高射砲は八八式七糎野戦高射砲である。太佐山陣地は九九式八糎高射砲が配備されていたとされる。またSX-344とSX-001に見られる砲座の内部を通るパイプは、電纜のためのものと思われる¹⁷。高射砲においては算定具からの情報を電氣的に伝えるため、必要な備えであると思われる。つまり府内町跡のコンクリート製砲座は少なくとも、規模及び形状が高射砲のものと同等とみることができる。一方で木製の機関砲座とされるSX-004は、規模も形状も類似する砲座が見当たらない。島根県平野陣地にも木製のものと思われる砲座が発見されているが、それとも一致しないため、そもそも砲座であるか疑わしい¹⁸。一部符合するものに九九式八糎高射砲木材砲床の写真があり（図8参照）、陣地入口の広さもスロープの幅と同程度である。九九式八糎高射砲は陣地固定が前提であるが、木材砲床は仮陣地または、ベトン（コンクリート）製砲座が間に合わない場合、運搬車を用い野戦用に使用する際に用いるとある¹⁹。SX-004が砲座であるならば、6基分のコンクリート砲座が完成するまでの仮設陣地のため、他の砲座の位置関係ともずらしながらも、離れすぎない位置に築城したものとも推測できる。

表1 高射砲座比較表

名	(外)角形	(外)一辺	断面	穴数	(中)形	(中)一辺	直径	砲種	備考
大友7次	8	約1.9m	平面	円12中1	正8	約0.8m	約4m	高射機関砲?	側面にパイプ突出、塹壕あり
大友17SX-1	8	約1.9m	平面	円12中1	8	約0.7m	約4.5m	高射砲?	
大友17SX-004	6	約3m	平面	無し	杭が四個		推定6.8m	高射機関砲?	前後にスロープ、2か所突出あり
大友17SX-115	8	約1.9m	平面	円12中1	8		推定4.4m	高射砲?	
笠寺陣地	8	約1.5m	凸状	円12中1	円柱	直径約1.5m	約3.75m	八八高	
太佐山陣地	8	約2m	平面	円12中1	8中円	約0.7m	約5m	九九高	砲側弾薬庫2か所と待機所
調布（どんぐり）	8		凸状	円12中1か	円柱		約3.3m	八八高	

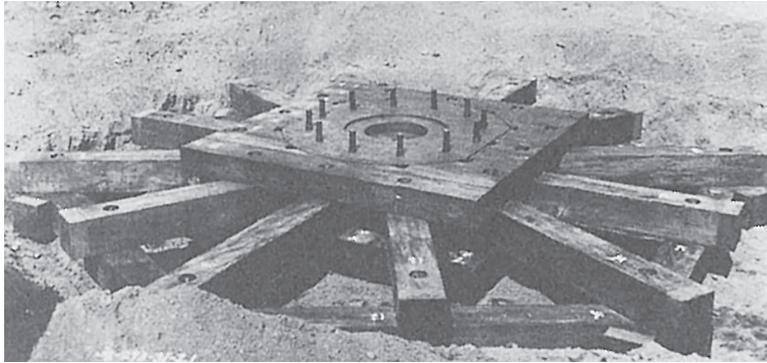


図8 九九式八纏高射砲 木材砲床『日本陸軍の火砲 高射砲』

5. 高射砲第132連隊第2大隊第10中隊と『西海海軍引渡記録』^{さいかいかいぐんひきわたしきろく}

大分を防衛していた高射砲連隊は高射砲第132連隊第2大隊第10中隊で、九九式八纏高射砲が6門配備された²⁰。それに加え、大分の防空には海軍の高角砲なども配備されていたことが『西海海軍航空隊引渡記録』からわかる²¹。(図9参照)しかし実働兵器は少なく、ほとんどが構築中または未着手である。海軍の記録には中世大友府内町跡の位置には何も記されていない。つまり海軍の高角砲などではないと言える。



図9 大分市内対空陣地配備図 文末脚注10と同様

☆ 探照灯陣地 七纏高射砲・十二纏高角砲陣地
 ○ 十二・七纏高角砲 機銃陣地 ○ 電波探信儀 ■ 噴進砲 × 構築中、未着手

☆は記録には記載されていないが、位置の確認として、中世大友府内町跡位置をしめした。

府内町跡の地に関して、鶴崎中学校の卒業生の証言に興味深いものがある²²。「それで現在のトキワインダストリーと、道路沿いの石油ガソリンスタンドの中間、当時明治村といったところに高射砲陣があったことをよく覚えています。そういえば、車窓からみて顕徳寺町、万寿陸橋の東

より、「みどり牛乳」付近の畑にかけて、「陸軍の二連双機関砲回転銃座式」が十基程度、また、大分機関区の車庫上に一基が空に向けてネットを張っていたようです。（このうち大半は模擬砲といわれた）。前半の高射砲陣地は明野付近のB2の事と思われる。後半の「緑牛乳」とは、2021年時点では移転したが、平成12年までは九州乳業株式会社（緑牛乳）の旧大分工場が、府内町跡第7次と第17次調査区の付近にあった。『高射戦史』によると、昭和20年6月29日をもって第16軍では特設機関砲隊が編成され、九州全域の重要交通施設に配備される。この部隊は13mm機関砲装備とある。大分にも来ており大分川鉄橋に4門、大分に2門とある。証言の機関砲はこの特設機関砲隊のものと思われる。つまり府内町跡第7次、17次調査区の付近には、特設機関砲隊が展開していたと考えられる。

6. 陣地の形態

前例として調査がなされた高射砲陣地の形状は、笠寺陣地、西淡路高射砲陣地²³、調布高射砲陣地の等は高射砲を半円形に配備し、その後ろに指揮所等を設けている。高射砲陣地を築設するにあたり、指針として『高射砲陣地築設要領』にて示されているが、12基にて円形の陣を形成するのが理想の一つだったようである。しかし実際には12基が一か所に集中配備されることは、部隊の関係や防衛の関係からなかったものと思われる。

中世大友府内町跡の陣地は、地図にも当然記録がなく、大分市の戦後間もない1947年の航空写真にも姿を見ることはできない。しかし戦中の舞鶴橋と滝尾橋、日豊本線を7月17日に空爆した際に、米軍により撮影された航空写真にこの府内町跡第7次、17次調査区の高射砲陣地と思われる陣地のような人工物を確認できる²⁴。（図10参照）

図10 昭和20年7月17日攻撃を受ける大分市
『米軍資料：大分空襲の記録』
国立公文書館より



図10下中央付近(矢印の交点)に砲座と思われるものが6基ほぼ等間隔で並んでいるように見える。これら砲座には円い影があることから掩体を持つと考えられる。位置関係から線路に近いものは7次調査のSX-344と思われる。発掘調査でも写真の陣形中心方向と、同じ向きにむけ塹壕が確認されているが、一致すると考えられる。同じく17次SX-115も突出部の位置が一致すると考えられる。SX-004については、ほかの砲座と位置も形状が異なることが写真でも確認できる。各砲座には塹壕または通路のようなものが付くと思われる。この塹壕または通路は写真からの推定であり、実際の形状は判然としない。なお砲の有無は判別がつかない。

砲座の周りにはある施設は、付属する関連施設と思われ、兵の待機所と考えられる。付属施設で特筆すべき点は中央二つで囲んだ施設である。砲座の電纜が中央に向けて伸びていたと推定すると、算定具などの観測機器または指揮所と推測される。他に、最も線路よりの囲んだ施設は3戸あり、ほぼ等間隔に並んでいる。また写り具合から切妻屋根の建物であると考えられる。左手へと延びるものは、道路であると考えられ、最も左手の屋根付き建物につく道路と写真下部の道路は現在の大分臼杵線の道路に接続する。17次調査区右側には建物跡の遺構が発見されているが写真からでは、発見できなかった。(図11参照)

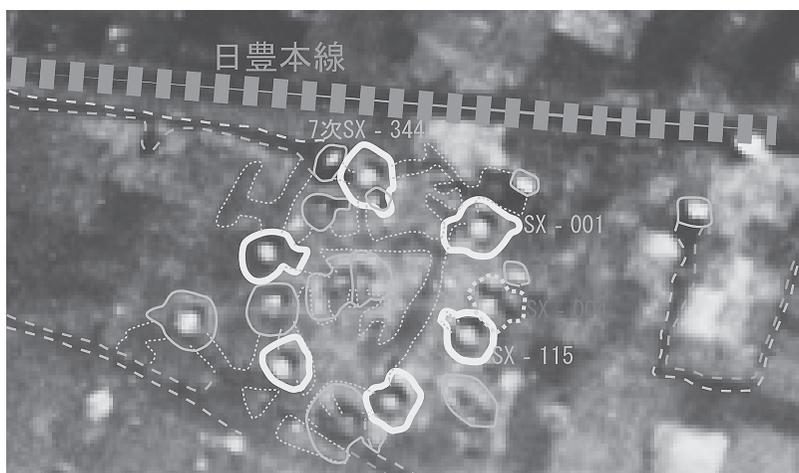


図11 推定中世大友府内町跡第7次、第17次高射砲陣地
図9の下中央付近を拡大加工図

7. 考察

中世大友府内町跡は高射砲陣地の調査のための発掘ではないこともあり、全容の調査が行われていたわけではない。そのこともあり、判明している限りでは半円形で機関砲と高射砲が混じる陣地であると考えられていた。他の遺跡の高射砲座と比較すると太佐山陣地の九九式八糎高射砲の砲座に類似していた。これは鉄橋に配備されたとする記録と一致する。

大分川の鉄橋を守るため、6月29日前後頃には特設機関砲隊が配備されたとあり、証言より機

機関砲隊が7次、17次の地付近に展開していたといえる。特設機関砲隊の装備は13mm機関砲とあり、証言には双連の機関砲を見たことより、陸軍ホ式十三耗機関砲と推測される。大分は4門＋2門であり、証言の十数基と一致しないが、模擬砲が混じていたことを考慮するならば、数的問題は解決する。しかし、この機関砲の砲架は3脚式であり、陣地に固定しない。陣地固定式の機関砲で、配備された可能性を考慮できるものは、四式基筒双連二十耗高射機関砲があるが、これは固定のためのボルトの数が8個であり、砲座の12個と一致しない。また口径も13mmではなく20mmと記録と合わず、この機関砲ではないと考えられるため、この陣地の砲座の使用者は特設機関砲隊ではないと考えられる。

要地高射砲隊はもともと作戦上、皇居、神社、軍需工場、湾港、鉄道、飛行場、水源地、発電所等を防衛するためにこれらの所在する要地の外周に主力を、又一部を要地内部の直接援護可能な位置に陣地を築城したとある²⁵。軍は空の脅威を早期に理解しながらも、一部の要地をのみ守る要地重視主義にとらわれていた。昭和20年4月の大本営の本土決戦準備要綱により、適当な時に適当な地へ部隊を展開できるようになった。これにより第16軍高射第四師団においては、九州各地へ部隊が散る²⁶。高射砲132連隊第2大隊第10中隊もこの動きに合わせて大分に来たと思われる。大分へ来た時期をさらに絞るなら、大分市金池小学校の日記に5月14日に空き教室を高射砲連隊に貸すとあるので、この時と考えられる²⁷。府内町跡の陣地は空襲時の写真より、少なくとも、昭和20年7月17日にはおおよそ陣が形成されていたと思われる。しかし写真の状態にて完成状態であったかは、不明である。

高射砲連隊が来る5月は大分でも空襲が激化し始めたころであり、激しさを増す空襲に、軍需工場が市街へと移動したことは先述したが、軍も同様であり、大分航空隊の使用した大分航空基地は度重なる爆撃により、機能を失い、代替として少し内陸の戸次へと移る用意を始める。鹿児島鹿屋基地の第五航空艦隊は本土決戦の要として、南九州の防衛にあたっていた。昭和20年8月3日には牧へと、宇垣纏中将率いる第五航空艦隊司令部が移転してきた。しかし戦力と呼べるものは保持しておらず、大分市牧周辺に横穴壕を掘り、そこにこもった。沿岸は上陸の可能性などもあり、陸軍の工場に関しては、九州の中心で最も内陸の日田の地を籠城の地に選んだ。これらの動きの背景は戦局の悪化に伴い、防衛から本土決戦のための戦力温存に切り替わったからと考えられる。実際動員された学生の証言に空襲時に、戦力温存のため航空機が出撃できなかったといった話もある。

この防衛目標の動きと同様に見ておきたいのが対空陣地の増築傾向である。図8より、既存陣地の密集度は沿岸のA区が最も多いが、それは大分航空基地と第12海軍航空廠を守るための布陣だと考えるのが妥当である。反対に砲に関しては構築中の対空陣地が、既存の陣地より内陸に構築予定であったように感じられる。この動きは、防衛目標の内陸へ転進と連動していると考えられないだろうか。基地と工場の防衛目標が喪失または機能不全に落ちたとき、次なる防衛目標は交通機関である鉄道、航空隊司令部壕、軍需工場壕になり、これを少ない部隊で防衛しようと

考えれば、B区に対空陣地が次々と作られる事も合点がいく。

以上のことを踏まえ、中世府内町跡の高射砲陣地は、この戦局の悪化に伴う一步転進する陣地増築の動きで、構築された高射砲陣地の一つと考えられる。砲座の使用主は九九式八糎高射砲を6門装備した、高射砲第132連隊第2大隊第10中隊と思われる。陣形は6基の円形で、コンクリート製砲座は太佐山陣地のものと同規模の高射砲座である。空襲による航空基地及び、工場という防衛目標の移動に伴い、鉄道及び鉄橋の防衛のため、中世府内町跡の地に布陣した。駐屯開始時期はすでに空襲が激化したところであり、木材砲床と思われる遺構があることより、陣地完成前より迎撃をするため布陣したと推測される。7月17日の空襲時には写真にて陣地を確認できるが、最終的に陣地が完成したかは不明である。

おわりに

米軍の記録によれば、大分市内は護衛も他の部隊の協力も必要なく、対空砲の射撃も不正確と報告していた。証言の中には度重なる空襲に対し、数回程度の反撃しかせず、砲が届いていない軍に対する不満や怒り、失望の色が見て取れた。しかし軍にしてみれば、民間人の防衛は眼中になく、それは市内中心部の対空陣地の手薄さが物語っている。大分の空襲では多くの民間人とともに、学徒動員にて働きに出ていた学生も亡くなっている。実用的な数の対空陣地もなく、大分市は甚大な被害を被った。府内町跡の高射砲陣地も、終戦間際に作られた陣地の一つであったと考える。戦後大分の町はきれいに復興した。一方で戦争の惨禍を伝えるものは少ない。戦争が身近にもあったことを学ぶ場として開かれ、存続しつづけるのが、戦争遺跡の役割であり、それを守るのが今を生きる我々の役割であると思う。

¹ 十菱駿武編2002『しらべる戦争遺跡の辞典』柏書房

² 敵航空機の緒元を電氣的に砲に伝達する

³ 見晴台遺跡では弥生時代の遺構が出る中、砲座が発見される。しかし調査の妨げになるとして破壊される。これを機に戦争遺跡の保護が本格化する。

⁴ 昭和3年に制式採用された砲で、名前の通り移動式の脚を持つので、要地だけでなく野戦においても使用可能である。最も一般的な高射砲であったが、その性能は航空機の進化に置いていかれていた。B29が高度1万m以上を飛行できるのに対し、八八式の最大射高は9100m(曳火8940m)であった。

⁵ 伊藤厚史「高射砲陣地の構造—名古屋防空隊を例に—」1993『三河考古』第5号三河考古刊行会

⁶ 昭和14年に準制式とされた。鹵獲したドイツ・クルップ社製88mm高射砲が原型である。B29登場以前であれば通用する性能であった。最大射高度は10420mであった。

⁷ 5と同様 高射砲陣地の設計図は脚注17にのる。

- ⁸ 72連隊は日露戦争後解隊し、小倉の歩兵47連隊が大分の駄原にくる。大戦末期にはその歩兵連隊も延岡に移動し、空いた建物を予科練が使用する。
- ⁹ 機能不全または、空襲を避けるため作られた秘匿飛行場や特攻基地が、県内に複数作られる。
- ¹⁰ 第12海軍航空廠には8科に分かれており、本廠は今津留にて航空機の修理、整備などを、飛行機科は春日浦にて魚雷の製造を、発動機科は高城工場にて発動機全般の作業を、兵器科は大道工場、補給科は深河内分工場などがあつた。のちにこれら工場には学徒動員により県内より学生が働きに来る。
- ¹¹ 大正12年の関東大震災を機に東京造兵廠に代わり、小倉造兵廠がその機能を請け負う。各地には支廠が作られ、昭和17年に大分にできた坂ノ市製造所（現旭化成大分工場）もその一つである。
- ¹² 田中裕介「大分の守り高射砲台座」神戸輝夫編2005『大分の戦争遺跡』大分県文化財保護協議会 P92
- ¹³ 中西武尚「発掘！ 発掘！ 発掘！」12と同様 P93
- ¹⁴ 発掘に携わった上野淳也先生に情報をいただいた。
- ¹⁵ 13と同様
- ¹⁶ 社会福祉法人楽山会編2017『高射砲陣地が語る戦争の記憶－永久平和を希求して－』所在地は、東京都三鷹市大沢4丁目、東部第1903部隊調布隊が、八八式七糎野戦高射砲を6門備えていた。6門のうち2門は、三鷹市立特別養護老人ホームどんぐり山の施設建設に伴い1基は埋没、1基は撤去された
- ¹⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03032195600、『高射砲陣地築設領』（国立公文書館）の八八式七糎野戦高射砲の図面より
- ¹⁸ 島根県簸川郡斐川町斐川町教育委員会1983『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』
- ¹⁹ 佐山二郎2010『日本陸軍の火砲 高射砲』陸軍兵器徹底研究 光人社
- ²⁰ 下志津修親会1978『高射戦史』
http://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/Viewer 2021.03.21.10:19 野崎哲司氏よりこの資料を教えていただいた。また同氏よりの指摘をもとに誤植を訂正させていただいた。
- ²¹ ・JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011378400、昭和20年9月20日 引渡品目録 西海航空隊大分、戸次基地（①－引渡目録－413）（防衛省防衛研究所）
・JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011378800、昭和20年9月20日 引渡品目録 西海航空隊大分、戸次基地（①－引渡目録－413）（防衛省防衛研究所）
・JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011378900、昭和20年9月20日 引渡品目録 西海航空隊大分、戸次基地（①－引渡目録－413）（防衛省防衛研究所）
・JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011379000、昭和20年9月20日 引渡品目録 西海航空隊大分、戸次基地（①－引渡目録－413）（防衛省防衛研究所）
・http://oogakaitenkiti.web.fc2.com/06source_books_ooitasi.html（HP大神回天基地管理者「野崎哲司氏」のご厚意により資料の提供を受けた。）西海海軍航空隊は大分飛行場を拠点とした航空隊である。宇佐飛行場も含まれる。
- ²² 鶴崎中学の一卒業生「鶴中の動員学徒」大分の空襲を記録する会1975『大分 の空襲』

- ²³ 所在地は大阪市東淀川ク西淡路5丁目である。西淡路の高射砲陣地は1990年代まで街中に6基すべてと指揮所が残存していた。しかしその後撤去が相次ぎ、2基と指揮所のみとなった。
- ²⁴ 奥住喜住、工藤洋三1999『米軍資料：大分空襲の記録』国立公文書館
- ²⁵ 5と同様
- ²⁶ 21と同様
- ²⁷ 柳本見一「きょうも授業なし」1965『激動二十年 大分県の戦後史』毎日新聞西部本社

付記

本論は著者の2020年度の卒業論文『高射砲陣地及び被害から見る大分市内の防空圏』の一部を改変し、作成したものである。

この論文を執筆するにあたり上野淳也先生、田中裕介先生、大分県立埋蔵文化財センター様、大分市役所 文化財課様、大分市歴史資料館様、野崎哲司氏ら他多くのご協力を頂きましたことを、心からお礼申し上げる次第である。